

「フォト・フィニッシュ」 Photo Finish by Mark Morris

「ここへ停めて、ジャック。」グエンはいった。

「あまり人目を引きたくないから。」

ジャックは一瞬ニヤッと笑った。「これで人目を引くってか？おれが24世紀にレインボーガールズとツアーをやったところを見せてやりたいよ。どうしてあの羽毛が光速でも落ちずにすんだのか、なぜのままだ。」

彼は真っ赤なゴルフと白い宅配の車の間の信じられないほど狭い隙間にSUVを止めると、駐車料金を払う様子も、駐車票を張る様子もなく、雪がうっすらと積もる舗装された道を大胆に歩いていった。グエンは通りの向こうからこちらを見ている交通監視員に微笑んで肩をすくめ、急いで彼を追った。

1月の1週目、新年明け早々からカーディフは、ほとんど絶え間なく渦巻く雪にさらされて、なにもかもが身を縮めているかのようだった。天気予報では、さらにひどくなるだろうとのことだったが、いまは太陽が顔を見せ、カチンコチンになった泥だらけの白の上にも弱いながらも日差しが降り注いでいた。この小休止の間に、クリスマスにケーキを食べ過ぎたり、冬の重ね着に着ぶくれたりという様子の買い物客たちが、新年セールで掘り出し物を、と繰り出していた。ジャックとグエンは、セント・メアリー通りの混み合う人ごみの中を、池の魚が水草の間を巧みに泳ぎ抜けるように、かき分けていった。

「男が見当たらない。」毛糸のぼうしの波間を、何度もつま先立ちしてじっと見ながら、グエンはいった。

ジャックは耳に装着している通信装置に触れた。「イアント？男が最後に目撃された場所を確認しろ。」

イアントはきびきびした口調で速攻で答えた。「ロイヤル・ホテルの向かいです。今、どこですか？」

「ロイヤル・ホテルの真向かいだ。」ジャックは答えた。「追っていた小鳥は逃げてしまったらしい。古屋敷の方に何か動きは？」

「いえ、何もありません、ジャック。男が何らかの遮蔽技術を使っているのか、それとも・・・」

「単なるでっちあげか。」ジャックは厚かましく割り込んでいった。「そして、おれのおろしたてのブーツが、成果もないまま雪だらけという落ちが付くというわけか。」

振り返ると、グエンが、緑のバラクラヴァ帽をすっぽりかぶり、指なし手袋をして、着古したツイードコートを着たビッグ・イシュー売りとおしゃべりをしていた。

「ありがと、ダッギー。」男の冷たい手にコインを握らせながらグエンはいった。「これでサンドイッチとお茶でもして。」

「随分満足してるみたいだな。」彼女が振り返ったところで、ジャックがいった。

「そりゃ、あたしが凄いから。」彼女はしとやかにいった。

彼はにやりと笑った。「で、何がわかったんだ？」

「男はここにいた。荷物をまとめて、約20分前に立ち去った。明らかに、相当周囲の注目を集めた。」

「君の彼氏が、そいつがどこにいったかを知ってたわけ？」 ジャックはたずねた。

グエンはキッと見た。「いえ、でも、明らかにホテルの清掃スタッフと思われる、エルキー・ミッチェルと名乗った女の子が、エイリアンと一緒に写真を撮ってもらっていたって。」

「もし、本当にエイリアンだったとしたら、」 ジャックはいった。

ふたりは道路を渡り、ブーツの底に付いた雪を落として、いそいそとロイヤル・ホテルに入った。受付の前を通り抜け、閉まりかけているエレベータのドアに向かった。エレベータには、先にひとり、背の高いブロンドのサファイアの目の男の客が乗っていて、ふたりのためにドアを押さえてくれたので、ふたりは騒がしい音を立てながら乗り込んだ。グエンの前で、ジャックの顔が急に明るくなった。

「ヘイ、」 彼はいった。「いつこの街に来たんだい？」

「仕事に集中しなさい、ジャック。」 彼女はつぶやいた。

ふたりはあてずっぽうで4階で下りた。ジャックは新しい友達にウインクを飛ばすと、まるで自分がホテルを所有しているかのように廊下を大股で歩いて行った。10メートル先の開いた扉の前に、タオルやシーツを積んだ金属製のトロリーが停めてあった。ジャックはトロリーに近寄ると、下の棚からタッパーを取り出し、グエンに差し出した。

「ショートブレッドビスケットはいるか？」

「いいえ、結構よ。」 彼女はいった。ちょうど、白髪混じりの髪を後ろでひつつめにした痩せこけた女性が、汚れたタオルを腕に抱え、開いた扉の奥から現れ、ふたりをにらみつけた。

「おはよう、ゴージャス君。」 ジャックはいった。

女性は感動した様子もなく眉を上げた。「入るのを待っておられるのですか？」

「そそられる申し出だ。」 ジャックはいった。「でも、今回は止めておいた方が良さそうだ。」

「わたしたち、人を探してるんです。」 グエンがキイキイ声でいった。「エルキー・ミッチェルです。」

女性は目を細めた。「エルキー？彼女、何かやったわけ？」

「恥ずべきことは何もしてない。」 ジャックはいった。「彼女がどこにいるかわかるか？」

疑わしいといった目つきで、女性はいった。「仕事をしているなら、その角を曲がったところにいるはず。」

グエンは女性のお礼をいい、もっと何かを期待したように相手はチッと舌を鳴らした。

彼らは319号室のバスルームの洗面台の下で、四つん這いになってもくもくと床のシミ落としをしているエルキー・ミッチェルを見つけた。

「いい眺めだ。」 ジャックは意見をいったが、女の子は何も反応しなかった。彼が傷つい

た様子だったので、グエンはiPodとイヤホンを指差した。

グエンは彼女を驚かせたくなかったので、エルキーの視界に入る位置まで部屋に入り込んだ。しかし、それでもエルキーは凄まじい勢いで立ち上がろうとしたので、洗面台の下に頭をしたたかぶつけてしまった。

「ごめんなさい。」グエンは申し訳なくて歯をくいしばるようにし、両手を上げながらいった。

エルキーはイヤホンを引っ張ってはずし、頭を撫で、パンダのような目を見張り、戸惑っていた。「どなた様でしょうか？」

「規範確認だ。」ジャックは淀みなくいった。「いくつか質問させてもらうが、いいかな？」

エルキーはおびえた表情を見せた。彼女は子犬のようにぼっちゃりしていて、かわいい豊かな表情とさくらんぼのような見事な赤毛の持ち主だった。「なぜですか？わたし、何も悪いことなんかしてません、本当に。」

グエンは女の子に大丈夫というように微笑んだ。「わかっている。わたしたち、先ほど通りで写真を撮っていた男を探してるの。エイリアンを連れた男よ。」

「君が、その・・・生き物・・・と、写真を撮ってもらっていた、と聞いたのでね。」ジャックはいった。

「あ？はい、その通りです。2ポンドもしたわ。」

「写真、見せてもらえる？」グエンは頼んだ。

エルキーは肩をすくめ、ビニールのスモックの前ポケットから光沢のある四角いものを取り出した。

写真にはエルキーの青白い丸顔と、木製のスタンドの上のバーにとまっている小さな生き物が写っていた。生き物はオマキザルともいえないが、ただ、輝く青い毛皮に、羊のような角が2本額に生えていて、カーブした角が軟そうなピンクの耳の後ろに伸びていた。

「本当にかわかった。小さな手に小さな青い爪が生えてた。」彼女はヘーゼルナッツ色の目を大きく見開いた。「本当にエイリアンなんですか？」

「いやあ、」ジャックは否定的にいった。彼は写真を手に取り、間近に見て調べた。「これは・・・ボリビア木登りだな。毛皮が青く染められているが。凶暴なやつだ。」

「ボリビア・・・」エルキーは首を振った。「いままで聞いたことも無い。」

「そうだろうな。」ジャックはいった。「希少種。実際、絶滅寸前だ。もう、繁殖用は4組しかいない。」

グエンはジャックが話題を盛り上げようとしているのがわかった。このまま放っておくと、彼はそのうちに堂々と、生き物の食生活や風変りな交尾の儀式の話をして、女の子を途方に暮れさせてしまう。

彼女は前に進み出て、ジャックの手から写真を引き抜いた。「これ、もらってもいい？」

エルキーは自信なげにいった。「あの、これは2ポンド払った・・・」

「20あげる。」グエンはお札を渡しながらいった。

エルキーは狼狽しているようだったが、お札を受け取り、ジーンズのポケットに押し込んだ。

「またな。」ジャックはそういって、さっさと部屋を出て行った。

ホテルの廊下に出るなり、彼の表情が曇った。

「これって、いったいなに、ジャック？」グエンはたずねた。

「わからない・・・だから心配なんだ。おれはずっとほうぼうを回ってきてる、グエン。おれは・・・」

「あらゆるものを見、すべてをやってきたって？」

一瞬、ユーモアのある表情が彼の顔によぎった。「そうだなあ、まだすべてではないが・・・それでも、地球近辺の惑星の植物相と動物相に関する知識は十二分に持つてる。」

「時空間の裂け目はあらゆる場所の物を吐き出してくるから、でしょ、ジャック。あなたにはわかってる。あたしの想像では、この小さな可哀想な子はどこか異星のジャングルで木と木の間を飛び移っていて、次の瞬間にはスプロットの雪の舞う凍える寒さの中へ投げ出されてしまった。たぶんどこかのやつが、半分凍えかけていたその子を見つけて、小銭稼ぎに使おうと決めたんでしょ。」

ジャックは顔をしかめた。「そんな単純なものではなく、とても嫌な予感がする。」

彼女はひじで彼をつついた。「ほら、認めなさいよ。ペテンにかけられるのがいやなだけでしょ。」

彼は眉を上げた。「ペテンにかけられるって。なんていいかたを・・・」

ふたりの後ろから、喉を絞められたような、恐怖に満ちた絶叫があがって、彼の質問は途切れた。グエンは素早く向きを変え、ジャックを見た。

「エルキーよ！」

ふたりは来た方向へ走って戻った。ジャックのコートが後ろでたなびいた。319号室の扉は少し開いていた。扉の奥で、まるで喉を絞められているかのように、エルキーが息を求めてあえぎ、喉をごぼごぼいわせていた。

ジャックは肩を扉にぶつけて開けた。彼とグエンは中に突進し、扉は壁に当たって跳ね返った。エルキーは窓の傍に立ちつくし、冬の日差しがをきらきらと輝くオーラのように彼女の体を取り巻いていた。少なくとも、最初、グエンはそう思った・・・そのうち、オーラが、エルキーの体を食べていることに気付いた。彼女を毛糸をほどくように分解している。気の毒な女の子が、まるで古着のセーターみたいに。輝く金色の光の編み棒が、回転し、食欲旺盛な蛍の一群のように素早く動き、冷酷に若い清掃係を貪り喰い、彼らの目の前で、彼女の体を見事に赤みがかった塵に変えていく。顔の皮膚がぼろぼろに崩れ、下の頭蓋骨が現れ、エルキーの口があくびをするかのように開いて、ぞっとする醜い声がもれた。「たあすうけえ・・・」

最後の言葉だった。次の瞬間、彼女の形ある体が、まるで乾ききった砂の彫刻のように床に崩れて落ちた。グエンはショックで悲鳴を上げ、手で口を押さえた。ジャックは、エ

ルキーを取り巻く光がひとつ、またひとつと消えていく中、一步前に出た。

「なんてこと、」グエンはつぶやいた。「いったい何が起こったの？」

ジャックはさらに注意深く前に出、コートの袖を持ち上げて、手首のヴォルテックス・マニピュレーターを表示を確認した。

「彼女は・・・消散してしまった。」彼はいった。「粉末にされてしまった。」彼はエルキー・ミッチェルの残骸の赤レンガ色の塵の山の傍にひざまずいた。

「何ものに？」グエンはいった。ショックが怒りに代わった。

ジャックは首を振った。「わからない。」

ジャックのイヤホンからパチパチという音が聞こえ、次いで金属的だが明瞭なイアントの声が入った。「ジャック？」

「なんだ、イアント？」

「何かが起こっています。」

「何てこといってくれるんだ。」ジャックは不平をつぶやいた。

「一連の表示を確認しました。とてつもなく大きいエネルギー・スパイクが複数です。すべて一か所に収束していつているようです。」

「どこに？」ジャックは噛みつくようにいった。

「ビュータウンの放棄された倉庫です。タフ河の上です。」

「座標を送ってくれ。」ジャックはいった。

「送信中。」ほんの少しの間後、イアントはいった。「スパイクのひとつは、あなたのいる場所そのもので発生しています、ジャック。あなたもグエンも大丈夫ですか？」

ジャックは意味ありげにグエンを見た。もし、エネルギー・スパイクが街中で記録されているならば、彼らがここで目撃したような死者がもっと出ているということの意味する。それもかなり多く。

ジャックは陰しくいった。「おれたちは大丈夫だ、イアント。おれたちは、倉庫に向かう。」

「そこで合流します。」イアントはいった。

彼らがたどりついたとき、見覚えのある一片の乱れも無いスーツ姿のイアント・ジョーンズが待っていた。SUBが近づくと、まるでここにインタビューに来たみたいに彼がネクタイをまっすぐに直す様子がグエンの目に入った。彼女にとっては乾いた焼ける様な朝だったにもかかわらず、その光景には思わず微笑まざりにはいられなかった。

「向こうの倉庫です。」イアントは雪の後が点々と残る瓦礫が積み上げられた荒地の先の金属の波板でがたがたの木製の壁を継ぎ当て修理した古ぼけたビルを指差しながらいった。波板の継ぎから錆がいく筋も流れ、まるで大怪我をした獣が死の苦しみに這いまわったような趣のビルだった。

「生命反応は？」ジャックはたずねた。

イアントは首を振った。「ありません。墓場のように静かです。」

グエンは辺りを見渡した。イアントの言葉はありきたりだが、正確だった。倉庫の壁にかつては太字で誇りを持って描かれたと思われる文字ーウィルソン&サンズ注入式塑造ーが、いまや色褪せ、剥げ落ちていた。ミスター・ウィルソンと彼の息子が誰であったにせよ、彼らはかなり前からもう仕事でこの道を歩くことは無くなったとみえた。風が群生するイラクサの間を吹き抜けるささやきとすぐ傍を流れるタフ河が緩やかに海に向かって流れ落ちていくソフトなぱしゃぱしゃという音だけがすべてだった。

「準備はいいか？」ジャックはウェブリー・リボルバーをずっと引き抜きながらたずねた。

グエンとイアントはうなずき、各々武器を取り出した。グエンは既にイアントにエルキーの死とその後の調査結果を伝え終わっていた。SUBの中から大急ぎで一連の電話をかけまくり、彼女とジャックが怪しんだ通りのことが起こっていたことを確認できたのだった。エルキーのようにエネルギーの波に襲われて死んだものは、男性、女性、子供を合わせて32人で、全員がその日の朝、カーディフの中心街で『エイリアン』と写真を撮っていたのだった。

3人は身をかがめ、低姿勢で倉庫に向かった。雪景色をバックに彼らの姿は目立っていたので、そのまま歩いて入っていても同じかもとグエンは思った。この仕事をしていて、この瞬間が一番ハラハラする一対峙する相手の正体がわからなくなれば、そう感じるのは当たり前だ。この瞬間にも、エイリアンの殺人光線に襲われて、彼らが蒸発しないとも限らないだろ？彼女とイアントとジャックは、何度も命取り寸前の状況を共に切り抜けてきたとはいえ、死を免れるわけではない。いや、オーケー、ジャックは死を免れるけれども、今日亡くなった32名と同じく、彼女とイアントはどこまで探ってもやがては死ぬ運命にある。

彼らは倉庫に近づき、倉庫の壁に背をつけた。彼女の心臓はドキドキし始めた。ジャックは左をグイと指差し、彼らは雪の中をねずみのようにすばやく動いた。格納庫のような扉が入口なのは明らかだったが、もっと目立たない入口は無いかを探した。それはビルの裏手にあった。倉庫に隣接する雑多な一連のプレハブのオフィスは、アルミのパネルが泥だらけで、窓は割れていた。

ジャックが一番近いドアに近づき、開けようとした。鍵はかかっていたが、ジャックが肩で押すと、ロックがバキンと音をたて、みな歯にギシギシ響いた。彼はドアを押しあけ、みなで入っていった。訓練通りに陣形を組みながら動き、武器を構えて隅々、片隅にまで注意を凝らした。しかし、空っぽのキャビネットの横に、日に焼けて色あせた女の子の写真の1991年のカレンダーがかかり、埃が堆積し、ガラスが飛び散っている以外は何も無かった。

ジャックは部屋の奥のドアを指差し、イアントはうなずいた。彼らが行こうとしたとき、グエンはジャックの腕に手を置き、ささやいた。「見て。」

ジャックとイアントは、彼女の視線を追った。薄暗がりの中、金属のファイルキャビネットに厚く積もった埃がわずかに揺れていた。

「感じない？」グエンはささやいた。「しばらく動かないで。」

ふたりは彼女のいう通りにした。イアントは目を細めた。「機械の振動みたいです。」

「心臓の鼓動かもな。」ジャックはつぶやいた。

グエンとイアントは彼のほうを見た。確かにあり得る。靴底から足を伝わって響く周期的な揺れは、大きなゆっくりとした脈拍みたいだった。

彼らは部屋を横切り、内側のドアに近づき、ジャックはゆっくりとノブを回した。ドアに鍵は掛かっておらず、ほとんど音も立てずに開いた。3人は薄暗がりの中に入っていった。目が慣れるまでしばし時間が掛かった。グエンは空間の広さと高さに感動に似た物を感じた。彼らが入ったドアは、メイン倉庫に直接通じていた。彼女は何が視界を遮っているのだろう、彼女の数メートル前でかすかな風になんかざらざらとさざめいているのは何だろうと思った。そして、何か黒いぼろぼろのシートー布かプラスチックーが何枚も天井からぶらさがり、巨大な空間が小さく区切られていることに気付いた。

3人は左手に入り込み、辺りをきょろきょろと見渡し、感覚を研ぎ澄まし、銃をあらゆる方向、あらゆる暗がりに向けながら、微かに音を立てているシートの間を静かに動き回った。

脈拍音が近くなり、方向が一定してきた。明らかに音を発しているのが何であれ、その方向に近づいていた。グエンの前に行くジャックがぼろぼろの黒いシートを回り込みー突然足を停めたのが見えた。上機嫌で驚いている風の表情が浮かんでいた。

「なんと、かわいいじゃないか？」彼はつぶやいた。

彼女は前に進み、シートを回り込んで、ジャックの横に行った。目の前の宇宙船は、大まかにいってサーカスのテントほどの大きさだった。外殻は金属とプラスチックもどきで、グエンが今までに見たこともない素材のようだった。船はまるでハロウィーンのちょうちんみたいに優しいオレンジ色に輝き、それに無数の黒いアンテナがちりばめられていて、巨大なユニみたいな外見だった。その下から、おびただしい数の曲がりくねった金属のチューブがのたくり、びくびくと動いていた。アイドリングしているエンジンから重低音の振動が感じとれ、船がまるで呼吸をするみたいに、膨らみ、しばむのが見て取れた。

「気をつけて、ジャック。」ジャックが前に出、手を伸ばすのを見たイアントは不安になっていった。

しかし、ジャックはイアントを無視した。脚とつま先でチューブの束をかきわけ、そつと忍び足で進んだ。

「何をやっているのかわかっているのでしょうかね？」イアントはつぶやいた。

「会話を試みているとか？」グエンは思い切っていった。

イアントは生徒の行為に不満をもつ学校の先生みたいな表情で顔をしかめた。「自殺するつもりでしょう。」

「自殺したとしても、少なくとも永遠に死んではいけない。」グエンはいった。「もし塵になったら、彼を掃き集めてハブに持って帰って、待つしかない・・・再構成されるのをね。」

イアントがコメントする前に、ジャックは船にたどりつき、手で触れた。その次の瞬間から、色々なことがあつという間に起こった。

船が内側から凄まじい光を発し、ジャック、グエン、イアントは瞬間的に何も見えなくなった。彼らは逃げる間もなく、ぼろぼろの黒いシートが天井から降って来て、3人にしっかりと巻きついてきた。彼らが銃を放さざるを得なくなるようにシートが腕を脇にねじり上げ、さらに力いっぱい両足首を縛ったので、3人は脚を取られてしまった。

グエンは息が止まるかと思うほど激しい勢いで床に倒れた。それでも、なんとか感覚を研ぎ澄まし、なんとか首をまわして、次の襲いかかってくる脅威に身構えた。光の残像で視界がぶれていたが、何者かが彼らのほうに近づき、薄暗がりから群がってくるのが、かろうじて見えた。小さくて素早く動く姿で、大まかにいえばヒューマノイド。青い。彼女は視界をはっきりさせようと、何度もまばたきした。

ゆっくりと相手の姿にピントがあつてきた。エルキーの写真に写っていた小さな、角のあるサルのような生き物が1ダースほど、まわりを取り巻いていた。彼らはワンピース型水着にそっくりなものを身につけており、それには金属がいくつもついていた。グエンの想像では、装飾は階級を示している一生き物が彼女をにらみつけ、一連のさえずる音をたて、それらを見せびらかす様子からでは。

グエンとイアントの視線が合った。ウナギの様なシートに束縛され、彼は肩をすくめることしかできなかった。

「申し訳ないけど、」グエンはいった。「理解できない。」

生き物はまたさえずり、三又に分かれた足をのばし、彼女の脇を突いた。

「ヘイ！」彼女は抵抗した。

視野の端で、船に何かが起こっていることに気付いた。彼女が頭を回すと、地面部分で人があくびをしたり、クジラが息をする潮吹孔を開くように、丸い開口部が開きつつあった。舌の様に傾斜路が現れ、虹色の光に包まれ、糸がほどけるように伸びていった。さらにサルの様な生き物が中から現れ、傾斜路をびよんびよんと跳ねて降り、その小さな両手に根っこの様な突起がたくさん突き出た銀色の装置を握り締めていた。

グエンは装置を凝視したが、人工的に作られたものか、自然のものなのかも区別がつかなかった。装飾を身に付けた生き物は、船から出てきた装置を持ったものにさえずりかけ、また足でグエンを突いた。エイリアンは箱状の装置を持ち上げ、彼女に向けながら近づいてきた。そのとき、ジャックが岸に揚げられた魚のように、縛られたまま激しくのたうちまわった。

「おい、おまえら！」彼は叫んだ。「こら、おれを放せ。この醜いチビザルども！今すぐ放さないと、おまえらの首をはねてやる！全員皆殺しだ！」

「頭を冷やしてよ、ジャック。」グエンはつぶやいたが、彼はのたうちまわり、身もだえし、彼らを捕獲した相手に侮辱的な言葉と脅し文句を叫び続けた。

司令官と見られるエイリアンは興奮した様子でさえずり、ジャックを差した。周りのエイリアンが彼の命令に従って集まり、ジャックを取り囲み、彼の体重をものともせず持ち上げた。彼らはジャックの体を起こし、彼を縛っているウナギの様なシートが何本も上に伸びて、天井にからまった。ジャックが立った状態で安定すると、箱を持ったエイリアンはグエンから向き直り、装置をジャックのほうに向けた。

「あれはいったい何です？」イアントは不安そうにたずねた。

「みなの写真を撮ったカメラだと思う。」ジャックはいった。

グエンは眉を上げた。「あたしにはカメラに見えないけど。」

「理由は、カメラではないから。」ジャックはいった。「見た目を偽装するため、視覚フィルターを使っているに違いない—そして、人間でいう写真家みたいに、彼ら独自のものだろう。この半有機技術に関していえば、非常に印象的だといえる。」

「で・・・これをたずねたら後悔するとはわかってはいますが、でも・・・これは本当にいったい何ですか？」

ジャックは頭を左右に振った。「経験にもとづく推量か？DNA読み取り強姦的エネルギー変換機。」

「エネルギーということは、つまり・・・」

「人間のエネルギー。生命力。たぶん、それが彼らの船のパワー源だろう。」

イアントはぞっとした。「ということは、彼らは他にもない・・・給油に来たわけですね？」

「時空間の裂け目に引きこまれたのだろうな。」ジャックはいった。「故郷から遠く流されてきたのだろう。」

生き物の手の中の箱状の装置がネコの喉撫で声のような音をたてはじめた。装置は光り輝き、点滅し、横のバルブが開いたり閉じたりしはじめた。

「うわ、くすぐったい。」ジャックはいった。

箱からピュンという音と共に、ジャックみたいなのが写った光沢のある四角いものが出てきた。

「おい、一番ハンサムに見える角度で撮ってくれたのか？」ジャックはいった。

エイリアンは彼を無視した。ジャックに背を向けると、傾斜路を昇って、船の中に入ってしまった。

「次は何？」グエンはたずねた。

「推測だが、結果を船のコンピュータに読みこませて、あー・・・おれを食い尽くすんだろう。興味深い経験ができそうだ。」

言葉が終わるか終わらないかのうちに、彼はうっという声を上げ、顔に苦痛の表情がみなぎった。

「ジャック！」イアントは叫んだ。

ジャックは頭を凄まじい勢いで後ろにのけぞらせ、今度は文字通り激痛に絶叫した。グエンに恐怖が走った。彼の体が突如きらきらと輝き始め、金色の光が無数ににじみ出て、彼の周りを渦巻き、光が紡ぎあがっていく。エルキーの身の上に起こったことが、いま、ジャックに起こっているのだ。光が激増し始め、エネルギーを摂取する狂気に取りつかれて彼を取り囲み、ぶんぶんとうなりを立て、踊っていた。ジャックは苦痛の悲鳴を上げ続け、イアントはジャックを名を叫び、無駄ながらも縛めから逃れようともがいた。グエンは目を閉じた。耳をふさぐことができたらしいのに、と思った。もう、ジャックの悲鳴にいたたまれなくなっていた・・・

突然、エイリアンの一匹がよろめき、膝からくず折れた。グエンはちょうど目を開けた瞬間、2匹目のエイリアンが1匹目の上に倒れるのが見えた。船が点滅し、エンジンのドシドシいう音が速くなっていくにつれ、他のもつまずき、頭を抱えた。グエンが頭を回すと、船が脈打ちながら、金属的なオレンジの外殻が空気を入れ過ぎた風船のように伸びきって見えた。

さらに3匹のサルミみたいな生き物が倒れ、動かなくなった。ジャックの体はいまや狂ったように小刻みに動く光の毛布に完全に囲まれ、不明瞭にぼやけていた。船の脈動が不明瞭な轟音になり、凄まじい熱と油が焼けるような悪臭を発し始めた。

突然、船の中で何かが爆発し、グエンは縛りが緩んでトフィーのように溶けていくのを感じた。彼女は縛りー粘度の高い腐った海藻みたいだったーを剥がし、ネバネバを脇に投げ捨てた。横でイアントも同じことをしていた。

ジャックを取り囲んでいた光が次第に薄れつつあった。彼はかろうじて意識を保ち、縛めがどろどろになるにつれ、前のめりになっていった。グエンとイアントは駆け寄ると、彼を受け止め、全員もろとも地面に屈した。ジャックはぼんやりとした頭を持ち上げた。「なにがあった？」言葉が不明瞭に繋がっていた。

「あなたが燃料を過剰服用させたのだと思います。」イアントは叫んだ。「いますぐここから逃げ出しましょう！」

ジャックを両側から挟んで引きずりながら、グエンとイアントは、死んでいるエイリアンそして死にかけているエイリアンのグループの中を、元来た方向に向かって走った。黒いシートは分解しつつあり、天井から溶けたタールのように滴っていた。2人はジャックを荒々しく動かしてドアを抜け、プレハブのオフィスに入った。船の反応炉が猛烈な勢いで臨界点に達し、地震の断末魔のように震えた。ファイリングキャビネットが凄まじい音と共に倒れ、溜まった埃が舞い上がり、カレンダーが壁から床に落ちた。グエンとイアントは、息苦しさにあえぎ、汗を流しながら、昼の日差しの中へと飛び出し、雪の中、ジャックをSUVのほうへ引きずっていった。

半分まで来たところで、船が爆発した。オレンジ色の光の爆発で、その甲高い音は、ニューポートまで響いたに違いない。ジャック、グエン、イアントは自分たちに何が起こったか気付く間もなく吹き飛ばされ、後ろから襲いかかってきた極度の凄まじい悪臭に駆り

立てられた。彼らは汚い地面と一緒に塊になって咳きこみながら叩きつけられ、破片が上から雨のように降り注いだ。数秒後、打ち傷だらけでぼろぼろになった3人は、頭を持ち上げた。

「みんな、大丈夫？」

ジャックはうめき、仰向けに転がった。「生き返るさ。またな。」

イアントは身を起こした。切り傷から血が流れて目に入っていた。「この仕事には、もっと洋服手当てを出して下さらないと。」彼はいった。

グエンは震えながら立ち上がり、振り返った。倉庫もエイリアンの船も跡形なく無くなっていた。ただ、地面に残る巨大な煙を吐くクレーターがすべてだった。

「興味深い群れだったな。」ジャックは彼女の肩越しに見、コートから雪をはたき落としながらいった。「彼らの持つ技術と共生して生きていたんだ。」彼が肩の周りで首をまわすと、筋肉がごりごり鳴った。「そうだな、朝の一仕事にしては最悪だった。見返りに、全員、昼休みを延長することにしようと思う。おれがおごる。」

苦しい体験を何でもなかったかのように、彼はSUVに向かって大股に歩いて行った。グエンとイアントはお互いに辛抱強い視線を交わし、ものうげによるめきながらジャックの後を追った。

Notice 2011/03/06

このドキュメントは、**Kubo Sachie** が個人の楽しみとして作成したものです。

元の著作物の著作権を侵害する意図はありません。

また、日本語作成時の誤訳・文章脱落等は十二分にあります。訳の正確さを保証するものではありません。英語ではなく、日本語で読んで楽しんでもらえたら、と思います。

なお、物語の中の出来事、人物はすべて架空であり、現実との類似は偶然です。(あったら怖いかも・・・)

参考：使用した原文の出典

TORCHWOOD THE OFFICIAL MAGAGINE

Published by Titan Books

Issue 20 :February 2010

'Photo Finish' by Mark Morris

Torchwood: Photo Finish